

ネガティブ感情の機能的側面に関する検討

○島田慶司¹・井白井真理子²・中尾敬¹

(¹ 広島大学大学院人間社会科学科研究科・² 信州大学人文学部)

問題と目的

ネガティブ感情は、外界の詳細な情報に着目させることにより (e.g., Bless & Fiedler, 2006), 認知, 判断, 動機づけ, 対人行動といったあらゆる対象に対して有益な影響をもたらす (e.g., Forgas, 2017)。しかし, ネガティブ感情の機能的側面を検討した実験のほとんどは悲しみ感情を扱っており, 分析的な情報処理との関連は悲しみに限定された機能である可能性がある。本研究では, これらのネガティブ感情の機能は悲しみに特異的なのか, 他のネガティブ感情にも共通するののかについて検討する。集団凝集性を高める (Izard, 1991) といった悲しみの機能が他者へ配慮した行動に寄与することが考えられるため, 本研究では分配課題 (Forgas & Tan, 2013) を用いた。

方法

参加者 大学生 109 名 (男性 42 名, 女性 67 名, 平均年齢 20.3 歳) が実験に参加した。そのうち, 感情喚起課題直後の感情についての評定値が, ターゲット感情で非ターゲット感情よりも高かった 91 名 (喜び群 26 名, 悲しみ群 23 名, 怒り群 19 名, 嫌悪群 23 名) を分析対象とした。

手続き まず, 課題前の感情状態を評価するため, 喜び, 悲しみ, 怒り, 嫌悪について 7 件法で回答を求めた (0: 全く感じない—6: 非常に強く感じる)。次に, 感情喚起課題として, 参加者に自伝的記憶の想起と想起内容のイメージを求め, 喜び, 悲しみ, 怒り, 嫌悪のうち無作為に割り当てた 1 つの感情を喚起した。その後, ポイントの分配者とその受領者からなる分配課題を課した。その際, 参加者には無作為に分配者に割り当てられたこと, 別室に受領者がいること, 参加者自身に分配するポイントが多いほど謝金が高くなることを教示した。各試行では受領者の顔写真を提示し, その受領者に割り当てるポイント数を 1 から 10 のキー押しで選択するよう求めた。受領者は試行毎に異なっており, 8 試行実施した。最後に, 感情喚起課題直後の感情について, 感情喚起課題前と同様に主観感情を評価するよう求めた。

結果

群と試行を 2 要因とする分散分析を行った結果, 群の主効果は有意ではなかった ($F(3, 87) = 1.60$, $n.s.$, $\eta_G^2 = 0.04$) が, 試行の主効果および交互作用は有意であった (順に $F(7, 609) = 2.61$, $\eta_G^2 = 0.01$; $F(21, 609) = 1.77$, $\eta_G^2 = 0.01$, $ps < .05$)。各試行における群の単純主効果の検定を行った結果, 第 1 試行で群の違いに有意傾向があり, 第 8 試行で有意差が認められた (順に $F(3, 87) = 2.64$, $p < .10$; $F(3, 87) = 2.94$, $p < .05$; Figure 1)。Bonferroni 法による多重比較を行った結果, 第 1 試行では喜び群と比較して, 怒り群の分配ポイントが有意に小さかった ($g = 0.85$)。第 8 試行では喜び群と比較して, 怒り群の分配ポイントが有意に小さかった ($g = 0.92$)。その他の試行においては有意な効果は認められなかった。また, 各群における試行間に有意差は見られなかった。

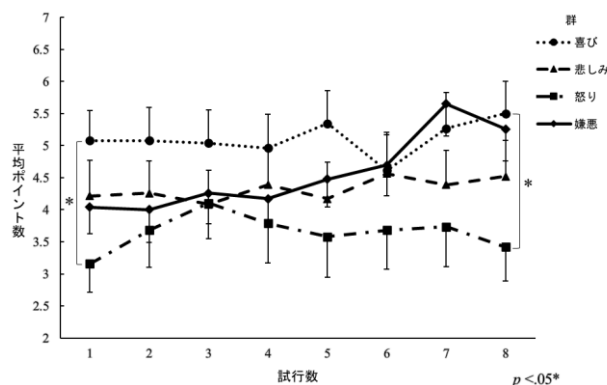


Figure 1. 各群における試行ごとの分配ポイントの平均値と標準誤差

考察

悲しみ群の分配ポイントは他の群よりも多くはなく, また, 悲しみ群, 怒り群, 嫌悪群の分配ポイントは喜び群よりも一様に多くはならなかった。したがって, ネガティブ感情の機能として主張されてきた情報処理への効果が, 悲しみに特異的な機能なのか, 他のネガティブ感情にも共通するものなのかを結論づけることができなかった。課題の性質の違いによって, 感情の影響の程度は異なることや (Forgas, 2002), 感情の行動への影響は, 自分の感情を細かく区別する能力 (感情粒度) によって異なる可能性が指摘されている (Pond et al., 2012)。そのため, 今後は課題の性質や個人差にも着目しさらに検討を深めていく必要がある。